

第五回星野立子賞受賞句集

『夜の森』 三十句抄

駒木根淳子

海けふは陸よりしづか龍の玉

海原に祈る濃き虹また祈る

夕焼けて健啖の父卓に待つ

独楽よりも紐の汚れてをる日暮

みんなの黙みんなの埋めゆく

螢待つかすかな飢ゑを押しとどめ

新涼の北鎌倉を掃いてをり

目薬をさして初雪迎へけり

水餅の闇より母の手がもどる

春愁のいつもあの日にとどりつく

寒釣のどのポケットもふくらめる

テトロンの日の丸うすし鳥帰る

父の亡き調剤室の冬灯

燃料棒融けゆく花の奈落まで

遺されて春の小川をうたふ母

蛇の腹擦りていづこも荒野なり

見る人もなき夜の森のさくらかな

ひまはりの話しかけたくなる高さ

土足にて生家を歩く日雷

夕蝸ひと様に母ゆだねをる

龍の玉雌伏重ねし色ならむ

冬瓜の途方に暮るる重さにて

涅槃図の近づきすぎて見えぬもの

狐火に遭ひ白髪を殖やしたる

野遊びの脱ぎてまた履く靴重し

永久に二時四十六分大霞

海底に黒髪のまま雛の坐す

猫の子に人口零の町の闇

被曝野と呼ばれやませの吹き荒ぶ

踏切のむかうが遠し黒揚羽